

加茂米くらぶ

だより

4月4日のヒョウ混じりの嵐には皆さん大変驚かれたと思います。種を蒔き、畑にやっとなを蒔いた作物もあった様ですが大丈夫でしたか？昨年秋号でお約束した通り、今年は高滝小・里見小・白鳥小の米作りを田植えから収穫まで3レポートで紹介したいと思います。綺麗な水が流れてくる白鳥小の田んぼでは今年も「うるち米」を作ります。七畝歩の広さの田んぼは生徒全員が交互に作業に携わります。出来たお米は秋の「白鳥祭り」でカレーを作った振舞われます。田植えは5月9日（水）の予定です。

里見小は今年も「もち米」に挑戦です。昨年同様5年生が担当し、「石渡さん」と「仲川さん」の頼もしい先生、いや強力な助っ人？のご協力で行われます。4月10日に種まきが行われ、田植えは5月中旬の予定です。



高滝小も田んぼの広さは七畝歩程、こちらも実績のある「もち米」作りです。毎年お世話になっている「杉田さん」のご指導で生徒全員が全て手作業で行います。地域の方々（老人会など）の熱心な協力がある温かい米作りです。出来たお米は各学年毎に加茂米くらぶ、食べたり、バザーに出したりします。田植えは5月の連休明けの予定です。皆さん頑張ってください！

おやおや？田んぼの周りから爺さん二人のやや高いべつべつ音が聞こえてきましたよ！
A「よお。お前が孫はこんだつこへあがつたつこ。おとんこんぼうだつたつけな？」
B「そだよ。A「あんなめだつたつけな？」
「につしいいけんはおおるよ！」
「ま・さ・ゆ・きだつて、ゆーらそいつたつただあなあ」
A「わりいよ。はあはあ「のうなんか」だかんゆるしてくねかなあ」
B「ま・しょうがねえな、ところでこんだ富山小に何人へえつたか知つたか？
7人だ、ちよあ、たまげたなあ！
A「あにこ？ほんとかえ、そんな子供がいたのだお、そらずぶんがなつたのだ」
B「そだ、がんばつた、がんばつた、ハハハ・」
（佐久間里山通信員）

魚屋の戯言



鯉が美味しい季節になりました。いつもならこう書き出すところですが、実はこの魚はほぼ百パーセントが冷凍で輸入されているので旬がありません。十年ほど前まではフランス付近で獲れる鯉を日本ほど高く買国がなく、豊富に出回っていたものでした。ところがBSE（狂牛病）の影響で、それまで主に肉食文化中心だったアメリカやヨーロッパで人気が出てしまったことと、それに加えて経済的に豊かになってきた中国も鯉を沢山食べるようになって国際相場が急騰してしまい、日本の魚屋としては実に頭の痛い問題です。それでも決して高いというほどでもありませんし、自身の魚なのに脂肪分が約二十パーセントもあり、身質も柔らかくて実に美味しい魚と言えるでしょう。

料理法は味噌漬けが一番美味しく召し上がれると思いますが、その他にも煮魚、照り焼き、或いは酒蒸しも美味しいです。鍋物にもよく合つて料理するかの工夫次第で利用価値はどんどん広がると思います。

我が家では鯉が入荷するとよく湯豆腐にします。淡泊な豆腐と濃厚な鯉の相性がよくて、実に美味い！湯豆腐ができます。銀だち



銀だち 鯉を選ぶ時はできるだけ大きいものを選ぶ事をお勧めします。魚体が小さくても構いません。魚体が小さい鯉は脂肪の成長不足で脂肪が十分につかない事が多く、がっかりするかもしれません。

そんな鯉には魚屋泣かせの困った弱点がひとつだけあって、ときどき加熱すると身がぼろぼろになって最後は溶けてしまう鯉がいます。よくまめに微生物がいる鯉がいて、鯉が死ぬと微生物と一緒に死にます。そのときにタンパク質を分解する酵素を多量に出すことによって鯉の身を溶かしてしまうらしいのです。その酵素は常温で最もよく働くので、多量に存在しているため冷凍・冷蔵状態では区別がつかず、加熱してみないとわからないという厄介な物です。これに当たると必ずお客さんから「古い物じゃないの？」と苦情が来ますが、決してそうではない事を理解下さい。（鈴木里山通信員）

第19回加茂地区カラオケ大会

優勝は子安政義さん



3月18日（日）、やわらかい春の日差しの中、恒例の加茂地区カラオケ大会が開催されました。会場の「ブリック」には大勢の観客が訪れ、歌と食事で午後のお楽しみを過ごしました。ゲストは昨年が続いて、リップレコードの大樹映美さんを迎え、審査集計の間40分の歌謡ショーを繰り広げました。

優勝 子安 政義さん（菅野「津野慕情」）
準優勝 北条 實さん（外部田「忘れ風鈴」）
第3位 金子 幸さん（朝生原「北上山」）
なお、我がが佐久間編集長は第9位と健闘致しました。来年は第20回の記念大会です。皆さんふるって参加下さい。（北 里山通信員）

4/29いきいき市原ワンテーマーチ

ゴールも登場！

4月29日（祝）市原市主催の「いきいき市原ワンデーマーチ（ハイキング）」が開催されます。今回は白鳥小学校をスタートしてゴールは養老溪谷駅です。参加は無料。当日の朝8時30分より白鳥小学校で受付をします。コースは28km・20km・10kmの3コース。体力に応じて選べます。28km・20kmコースは9時15分まで、10kmコースは10時40分までに受付して下さい。小学生以下の方は保護者同伴で参加して下さい。がんばって歩いた後は養老溪谷駅前で足湯のサービスが待っています。新緑の養老溪谷を家族みんなで楽しむ絶好の機会です。是非参加下さい。なお、雨天の場合は実施情報を当日午前5時30分よりテレビホンサービス（23）8686で確認できます。その他お問い合わせは市原市役所スポーツ振興課（23）9851まで。

加茂八景

加茂にも全国的？に有名なところ、文化財などとして指定されている名所が幾つもあります。そこで、市原市ふるさと文化研究会会長の相川孝夫さんに「加茂八景」として挙げていただいた所を改めて訪れてみたいと思います。第一回は戸面の「鯉橋・出世観音」です。養老溪谷温泉街に入って最初に目に入るのが鮮やかな朱色の鯉橋です。実際歩いて渡るとかなりの急勾配なのがわかります。綺麗なイルミネーションで飾られ、静かな温泉街に華やきを演出しています。橋を渡り、杉木立の坂を上ってトンネルを抜けると間もなく綺麗に整備された出世観音の境内に出ます。源頼朝が石橋山の合戦に敗れ、房総に逃れた時に祀った観音様として、更に出世祈願に卓内外からも参拝客が多く訪れるようになっています。現在



「出世観音」立園等（佐久間里山通信員）
情報提供・取材依頼はお近くの通信員へメールでも受け付けます。
尚、紙面及び記事に関するご意見・お問い合わせは、市原商工会議所 市原市五井中央西1-2-25 TEL0436(22)43005 担当 北までEメールアドレスは kita@cci-ichi.hara.chiba.jp 又は http://www.yo-ro-kadoya.co.jp/kunsei.html
次回夏号は7月20日発行予定です

加茂里山通信

平成19年春号

加茂地区全小学校の新入生の皆さんです。

今年度は富山小に7名という近年になく大勢の新1年生が誕生しました。がんばれ！加茂の宝たち

白鳥小学校

5名

富山小学校

7名

里見小学校

10名

高滝小学校

12名

新入学おめでとう！加茂の宝たち

富山小学校

7名

白鳥小学校

5名

里見小学校

10名

高滝小学校

12名

月出小学校 閉校式

思い出の写真、このまき展示して欲しい気がします

3月25日（日）、市原市立月出小学校（黒沼純校長）で閉校記念式典がおこなわれました。記念式典には、歴代教諭、卒業生、月出地区の住民など200名を超える参加者が集まりました。会場となった体育館では、恩師、同級生、先輩後輩との久しぶりの再会を喜ぶ姿がそこそこ見受けられました。式典は、閉校宣言に続いて134年の歴史を、貴重な映像とテレビリポートで振り返りました。思い出の「想いの陰」の除幕式をもって終了となりました。（北 里山通信員）

式典会場の体育館はいっぱいでした

月出小に想う

とうとうこの日が来りました。市内で最も長い歴史を誇った月出小学校の名が消えてしまうのである。あれは三千数年前、加茂中に入学した時に初めて月出小からの生徒に出会った。当時も他の小学校の卒業生よりずっと少なく6・7名だった記憶がある。今改めて思い出してみると、その大半が物静かで穏やか、そしてシャイだった。そんな月出っ子達を他の生徒達とは異なるように優しく接していたように思われる。過言かも知れないが、加茂人の根底ではないかと思えるその性質が、彼らから師らゆき出ていたのではないだろうか。今でも会話の中で「月出」という言葉が出た瞬間に、その言葉を聞く側、そして語りだす側にも必ずほころびた表情が見られる。それは、昔から加茂の中でも特に生活や交通の面で不便な環境でありながら独自の文化・自治を立派に作り上げてきた「月出」の里への温かい想いが心のどこかにあるからだろう。

雨の中で厳かに行われた除幕式

より豊かで快適な社会環境づくりを目指して

人と環境をどこまでも大切に。実り多き未来へ、杉田建材は、地域の皆様と共に歩み続けてまいります

杉田建材株式会社

本社ビル 市原支店

HONKA

Today's homes. Naturally.

ホンカ 検索

ホンカ房総 太陽工業株式会社 市原市馬立414-1 Tel 0436-95-5641 www.honka-bouso.com

加茂八景

日頃はみなさまのご愛顧を賜り、心より御礼申し上げます。

宿泊業専門に
先にご案内させていただきましたように、当館では3月1日より旅館本来の業務であります宿泊業に専念させていただいております。お祝い事やクラス会・ご法事、または各種ご会合等にご利用いただきました地元の皆様方には、これまでのご厚情に対しまして深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

当館は、ここはどんな宿なんだろうと多少の不安をかかえてお越しいただいたお客様に、翌朝は笑顔でお帰りのいただけるような宿でありたいと考えています。それにはなにより入念な準備と心のゆとりが必要です。そのためにこの決断は必要なことと判断いたしました。どうかご理解賜りますようお願い申し上げます。

城茂加旅館

代表 征矢貴造

〒290-0555 市原市高滝9-2
TEL0436-98-0025 ホームページ http://www.uzushio.net/kamojo/
FAX0436-98-0471 Eメールアドレス kamojo@deluxe.ocn.ne.jp



「あずの里」で熱の入った勉強会

加茂産業振興広場建設へ

加茂の地域振興を

1月号で既報のとおり、運動広場の建設に付随して加茂地区の地域振興のための拠点も計画されています。

加茂地区の産業組合の責任者の賛同も得て「産業振興広場建設促進準備委員会」も結成され、その第一歩を踏み出したところですが産業振興実現のための勉強会が開催されています。

2月9日には加茂支所において市原市の経済部長でもある木村氏の「個人的な見解」としての振興策が披露され、3月19日には道の駅「あずの里」での勉強会も実施された。

あずの里は施設建設を市原市が行い、全体の運営を観光協会、産直部門は（有）アグリで行うという仕組みになっている。この（有）アグリは周辺の農業生産者があずの里の産直部門を担うために設立した会社で、現在の形に落ち着くまでにかなりの紆余曲折があったとある。

あずの里建設にあたっては市役所側の恩恵として現在の構想が当初からあり、成功のカギは周辺の農業生産者の「自立的な協力」が得られるかどうかにかかっていたように伺われる。

「サクラ咲く！」小湊鉄道の春

小湊線の利用者に美しい桜を楽しんで貰おうと市原市交通政策室が企画。小湊鉄道と鶴舞、高滝、里見、白鳥の各小学校が協力して桜の植樹が3月5日に行われた。

卒業記念植樹として鶴舞、高滝、里見、飯給、大久保の5駅に植えられた桜は観

高滝小の皆さん

桜を植えるだけなら行政あるいは小湊鉄道が造るのだが、小学校まで巻

里見小の皆さん

き込む企画は調整の手間も増え大変な企画となる。ただしその分の効果は複合的なものとなって発現されるだろう。ここに地域まで含めると準備の間は何倍にも増えることになるが是非、その方向へと発展して欲しいものだ。

行政十企業十学校十地域十ボランティアの協働が理想の姿だろう。

白鳥小の皆さん

加茂支所での集中した会議

の「自立的な協力」の難しさを（有）アグリ代表の方はすいぶん強調していました。呼びかけに応じて会議に参加した生産者は当初100軒弱。会社の設立までに重ねた会議はなんと130回ほどだそうで、会議を重ねるたびに参加者が減り続け、最終的に会社の出資者は5人、社員1名、パート8名の陣容で現在は運営されているそう。

スタート当初は出品者も少なく品揃えもままならなかったそうですが今では80軒を超える生産者が登録し、常時50軒ほどの農家から野菜や加工品の提供を受けるまでになっているそうです。

「頼まれれば協力してやっぺ」では絶対に成功は無いというのがアグリ代表者の思いだそうです。

皆が自分の利益のために積極的になっているからこそ商品としての野菜や加工品作りに力が入るのは当然でしょう。

ちなみに、出品者のトップの方は1年間にすごい金額（データを見ましたが本当にすごい）

山からの発信

（大曾根里山通信員）

山菜つ

零そで劇的変化の時代

今年の冬は近年にない暖冬でとても過ごしやすかったものの、何か釈然としないのはこれがやはり異常であるという現実です。昔南極や北極の水が解けたら海面が七〇メートルも上昇した。今それは現実味を増して南極や北極の水は徐々に減少しつつあり、そのために世界で一番最初に沈んでしまうといわれている南太平洋の国「ツバル」は浸水によって国家存続の危機にさらされています。日本でも沖縄などの珊瑚によって形成されている平坦な島などは徐々に影響が出てくるかもしれません。又、本来なら冬眠するクマが冬眠をしなくなったものもあるとの報道もあります。この異常気象はこの冬に限りません。昭和三〇年代から四〇年代では「今日は本当に暑い」という時でも気温は三度かそこらでしたが、近年三十六度から四〇度という数字が出て当たり前になってしまいました。又同じ三〇年代から四〇年代には冬場の水は厚く張り、池などの水の上で子供たちが遊びでスケートの真似事などをしたものです。今は考えられないことです。地球や人類の何億年、何万年という歴史の中でこの三〇年間で四〇年間は、ほんの一瞬にしか過ぎない時間ですが、その一瞬とも言える時間の間に最高気温が四度から八度も上昇している現実、私達が劇的な変化の時代に生きていることを思い起こさせます。劇的な変化は何も地球環境に限りません。私たちの生活環境も科学技術の加速度的な進歩によって劇的に変わってしまっています。同じ三〇年代から四〇年代で夢物語であった「鉄腕アトム」のロボットの時代が今やすぐそこに迫ってきています。小学生にパソコンの授

加茂の車窓から

道路沿いには黄色やピンク、黄緑、白、赤と色鮮やかに花や草木が咲き乱れ、田んぼには水が張られ、夜にはカエルがゲロゲロと鳴く暖かい春がこの加茂地区にも訪れましたが、皆さんはどうお過ごしでしょうか？ えー！カエルの泣き声で寝られない？ そんな事はこの加茂地区に住んでいる方々には無いでしょう。逆に意識していなければ気にもならないのでは？ そんな事とはおかく、新年度を向かえ色々忙しい方が多いでしょう。

さてそんな中、スポーツの分野では春季大会や選抜大会などが行われていると思いますが、私も自分の子供の通っている白鳥小学校に「白鳥フアイトーズ」という小学生のソフトボールチームがあり、このチームの指導者の一人として二年程前から参加させてもらっています。選手は白鳥小学校の生徒で構成され、六年生から二年生まで総勢二十一名です。

現在、大会に出場する時には2チーム（Aチーム・Bチーム）で登録しています。最近では少子化の波がこの加茂地区にも押し寄せ、白鳥小学校も生徒数が減少し、白鳥フアイトーズも年々選手が減ってきています。

そんな中、平成十八年度白鳥フアイトーズ（国本・平野英敏監督）の県内全大会の戦績は勝率五割以上、そして市内大会では優勝、準優勝という成績を残しています。しかしこの様な結果の陰には、大会に出るまでの練習で子供達は、怒られたり、泣いたり、一方、監督やコーチは「イライラ」「キリキリ」と、どうなっちゃうの？という状況もしばしばあるのです。そんな練習の積み重ねで、大会では監督・コーチを中心に子供達が「一体となって戦い、保護者の方々は我を忘れて応援しています。そして子供達が、映画やドラマでも観ているかの様なプレーをやっているのです。そして勝った時の感動は言葉で

宝船贈呈式

新年恒例、本紙読者対象の宝船当選賞品贈呈式が2月12日、月島の商工会議所加茂支部で行われました。お馴染みの一輪車・スコップ・たばらがなごに加盟、自転車も登場。一段と豪華・多彩になった賞品に当選者の皆さんもえびす顔。おめでどうございしました。よく見ると今年の当選者は全て女性！。男性の応募者もおられますが、圧倒的に女性の応募が多いです。中には2年連続で当選した方もいてビックリ。「あたりっこない」と思っている方、葉書を出さなければ始まりません。他のどの「抽選会」より確率がいいと思いますよ。

求む！加茂のドクターコトー！

市民病院を救え！

市民病院の存続の危機にあたり、署名のお願いが各町会にあたりました。結果的には住民の9割を超える署名が集ったと聞いています。それではこの署名だけで市民病院が継続されていくのでしょうか？ この機会に地域医療のあり方、特に加茂の特性を考慮した病院の経営について地域の住民が真剣に考えなければならぬ時期を迎えています。今回の市民病院存続の危機は医療法の改正に端を発しています。インターン制度の改変で経験の有る医師がインターンにマンツーマンで付いて指導しなくてはならないという方針に変わったことによる大学病院の医師の引き上げからこの状態は発生しました。これは鶴舞病院でも同じ状況が生まれるとしていいます。

では過疎のなかで、患者の総数が減る一方の市民病院がどうしたら存続できるのか、どんな仕組みにしたら病院経営が出来るのかを地域住民として真剣に考えることを始めないといけない時代を迎えているといえます。

そこで一つの提案です。

市の施設を指定管理者制度として市民団体に開放する試みが始まりました。市民の森のように地元市民が管理運営することによって新しい試みが生まれ、入場者数が飛躍的に増えた事例がありますが、病院経営でも民活導入の試みがあったら良いと思います。

市が経営の主体となって医師に給料を支払うとなれば、税金でまかなう仕組みとして収入の面で開業医を超える報酬を支払うことは出来ません。しかし考え方を変えて見れば、独立開業したい医師がいたとして、収入の最低保証をして、設備の最低限整った病院を自由に使用してよい仕組みにすれば自ら開業資金を調達しなくても開業できる魅力が生まれ、加茂の地に乗り込ん

んできてくれる医師もいるかもしれません。テレビドラマで高視聴率を上げたドクターコトーの報酬がどういう仕組みになっているかは知りませんが少なくとも行政が事務、施設を提供して自由な診療をさせている事実はあります。ここに最低保障の報酬と出来高報酬の上乗せがあれば魅力が増すはずです。

地域医療の有り方も考えて見ましょう。患者として大きな病院にかかるのは安心感としてよくわかります。しかし、窓口として地元の病院にかかり、状態によって総合病院に紹介してもらい、市民病院で初診を受けて、状態によって大きな病院を紹介してもらう仕組みが確立した場合、高滝にある病院の魅力は格段に飛躍します。

千葉県内の大病院を思い浮かべて下さい。市原市でも労災病院、鶴舞病院があります。鴨川には全国でも有名な亀田病院、勝浦の塩田病院、君津中央病院もリニューアルを済ませ益々充実してきました。

市民病院を中心に円を描いたとき、これらの病院には1時間以内でどこにでもいけます。こんな恵まれた位置関係があるのでしょうか。発想を転換すれば市民病院の存在価値をどう言うよりも、無くてはならない初診病院としての存在価値が大いに上がるはずです。

それにはまず市民病院を存続させること。存続の意味をはっきりとさせること。住民としての権利を利用すること。地域住民としてそのところをしつかりと自覚することから始めなければいけません。

無くなると知らされて「それじゃ困る」というだけでなく、それじゃ今まで市民病院をどれだけ利用していたのかを自ら振り返って、患者としての有り方を自分自身で考えて下さい。患者が多ければこんな事態には陥らなかつたであろうと思います。

そしてドクターコトーを支える島の住民のようにドクター市市民病院を支える住民意識を加茂の住民自らが盛り上げていく心構えを皆さんが持つていただくことに大きな期待をしています。たとえば個人開業医が入院患者を抱える病院になろうとしたら大変な設備投資が必要になります。それならば市民病院の施設をそのまま地元開業医に使ってもらうたらどうでしょうか。医師は設備投資もしなくて病院を手に入れることが出来ます。加茂の住民はより良い設備で馴染みの医者に診てもらえることが出来ます。市原

理解も協力もできないニュース

四月の初めに新聞に折り込まれてきた緑色の一枚の紙は加茂地区になんとも言いようのない鈍い痛みのようなものを与えました。そこには市原市民病院から三月末を持って外科の医師二人が退職することを書かれていました。そのことが何を意味するかといえは

「市民病院の外科の医師はいなくなり内科の医師一人が残ること」

「そのために外科の診療はなくなり、診療時間外の急患診療もなくなる」と

「入院ができなくなる」と

「人工透析もできなくなる」と

「設備はありながら病院としての体はなすすもはや診療所並みになっていくこと」と

ということです。市原市との合併以前に加茂村立の加茂病院として親しまれていた病院でした。その国保市民病院が実質的に病院ではなくなってしまう現実を受け入れがたいものです。インターン制度の見直しで大学病院の医局が医師の引き上げをはかっている、この市民病院に限らずあちこちで医師の引き上げが始まっていると聞きます。折り込まれたチラシには「大変ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。」とありまは。はつきり言っていることには理解も協力もできないということが、住民の九割にも上る署名に現れています。病气や怪我は待つてはくれない。お年寄りが通える距離の病院は必要です。市原市唯一の市立病院を病院として存続させるためにも一刻も早い医師の確保と体制の整備を市と関係者の方々にお願します。

そして

冬から春にかけてさまざまなことのある加茂地区ですが、今この辺を車で走るとあちこちに山桜が見えます。そして木々は少しずつ緑の葉を萌えさせています。時代が変わってもそこばかりは変わらない姿を見せてくれます。この季節に車を走らせてあちこちの山の変化を見るのは本心から楽しみです。昔の人は美しい日本語でこの時期から緑の葉が生い茂っていく山の様子をこう表現しました。「山菜つ」（征矢里山通信員）

喜ばしいニュース

冬かこの春にかけてこの加茂地区にはうれしいニュース・残念なニュースがありました。里山活動をしている市原ルネッサンスの方々が中心として山間部に捨てられていた粗大ゴミなどの撤去作業が行われたことはもちろんのこと、そういう活動を率先して行っている団体が加茂地区にいくつもあることは喜ばしいニュースでした。ボランティアで参加された方たち、本当に「苦勞様」でした。私の住む高滝地区もダム湖周辺が心無い釣り人によって飲食物のゴミだけでなく釣り針なども捨てられ、場所によってはゴミ捨て場状態にされています。年に何度か拾っていますが、ゴミのない状態を保つことがゴミを捨てさせないひとつの方法だと思います。ダム周辺では多くの人が健康のために散歩しています。散歩の道すがらゴミをひとつでも拾っていただけたら少しずつこの辺もきれいになっていくと思います。ゴミを捨てないよう呼び掛けることはもちろんですが、私たちが身近なところのゴミを拾うことでゴミのない状態を保ち、ゴミを拾う姿を見せることでゴミを捨てる人の数を減らせるのではないかと考えます。

きょうから月出小学校

月出小学校の閉校のニュースはやはりとても残念です。一三四年の歴史ということは、現在の二〇〇七年から引いてみれば一八七三年。明治六年に学校が始まったということ。市原の中でも最も早く月出の地に小学校が開校されたのには先人たちの先見の明や子供たちの教育にかける熱い思いなどもあったことでしょう。